

## A Collection of School Song Lyrics by Toki Zenmaro

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹治, 麻里子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/903">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/903</a>

## 土岐善麿作詞校歌の収集

丹治麻里子

土岐善麿は歌人や新聞記者として著名であるが、他にも多くの顔を持っていた。代表的なものとして、エスベラント学会理事（昭和三（一九二八）年就任）、日比谷図書館長（昭和二十六（一九五一）年三月就任。図書館人としての土岐善麿の業績については、大伏春美氏・大伏節子氏編著『土岐善麿と図書館』（新典社、二〇一一年）が大変参考になる。）、国語審議会会長（第一期から第五期（昭和二十四（一九四九）年十一月十日から昭和三十六（一九六一）年三月二十二日まで）が挙げられる。

研究者としては、万葉集、田安宗武、京極為兼、漢詩などを研究し、『作者別 万葉全集 上巻・下巻』（アルス、一九二八年）、『田安宗武 第一〜四冊』（日本評論

社、一九四二年〜一九四六年）、『京極為兼』（西郊書房、一九四七年）、『新訳 杜甫』（光風社書店、一九七〇年）など多くの著作がある。このうち『田安宗武』は帝国学士院賞を受賞した。ほかに、論文や随筆の執筆ももちろん多い。

さらに新作能の創作までも行い、「夢殿」（一九四三年初演）、「実朝」（一九五〇年初演）、「鶴」（一九五九年初演）など十六編の作品を残している。

そしてもう一つ、「作詞家」としての顔も持っていたのである。土岐が作詞をしたものは、合唱曲、童謡、社歌、仏教歌、自治体が制定する歌（区歌・市歌など）、軍時歌謡など、実に多岐に渡る。これらに加えて、特に多くの作詞を手がけていたのが「校歌」であった。

武蔵野文学館では土岐の業績の一つとしてこの「校歌」に注目し、研究を行っていくため、その第一段階として土岐が作詞した校歌の収集を行ってきた。本稿ではこの活動の記録として、校歌を収集するに至った経緯、校歌の収集方法、現段階での収集の成果、成果とその公開について記していく。

まずは、武蔵野文学館というものの概要とこれまでの活動を簡単に紹介したい。武蔵野文学館は平成二〇（二〇〇八）年に発足した。主な目的は、「武蔵野大学」や「武蔵野」に関する文学者、文学作品について研究し、その成果を公開することである。この目的に沿い、武蔵野文学館では多くのスタッフたちが研究を行い、その成果をパネル展示や図録の発行という形で公開してきた。

例えば、第一回目の企画展示を平成二十二（二〇一〇）年十月に開催し、「土岐善磨・秋山駿・黒井千次 武蔵野の教壇に立った文学者」と題して、土岐善磨・秋山駿・黒井千次という武蔵野女子大学及び武蔵野大学に教壇に立ち熱心に学生を指導した三人の文学者を取りあげた。

会期終了後は図録の編集に着手し、展示内容の再掲・再編に加えて展示開催までの道のりと終了後のスタッフの所感などを「第一章 企画展示の記録」「第二章 企画展示を終えて」「第三章 企画展示前後」の三章構成でまとめた図録を、平成二十三年三月十四日に出版した。

本展示と図録はどちらも好評を博し、図録は在庫がなくなるまでになったため同年五月三十日に増補改訂版を出版したが、こちらも同様に多くの方が購入するところとなっている。それだけ、この三人の文学者たちや「武蔵野」という土地に興味を持ち、知りたいと考える人が多いということだろう。

また、土岐善磨研究に限って言えば、成果の公開として『武蔵野文学館紀要 創刊号』（武蔵野大学武蔵野文学館準備室、二〇一一年）所載の「土岐善磨著作年表」がある。冷水茂太氏と斎藤英子氏が既に発表している著作年表を踏まえつつ、土岐の著作の現物を一つ一つ調査し、その結果を、単行本（藤井真理子氏担当）と能楽関連の雑誌掲載分及び単行本（深澤希望氏担当）とに分けて出版年順に記したものである。

文学館の調査が利用された例もある。『武蔵野文化を学ぶ人のために』（土屋忍編、世界思想社、二〇一四年）中の土屋忍氏による「コラム 武蔵野・むさし野・Musashino―若山牧水と土岐善麿」には、スタッフの井上悠氏が調査した土岐の第一歌集『NAKIWARAI』（一九一〇年）の書誌（未完）が参照され、土岐が短歌をへボン式ローマ字の横書き三行書きで表したことに對する考察が述べられていると共に、『NAKIWARAI』のテキスト全体の内容についての研究がほとんどなされていないことが指摘されている。

このように、武蔵野文学館では「武蔵野大学」や「武蔵野」の文学について調査研究と公開を行ってきた。

それでは、土岐が作詞した校歌の収集に話を移す。武蔵野文学館がなぜ土岐の作詞した校歌の収集を始めたのか、収集の方法はどういうものなのか、収集した成果とそれをどのように公開したかを、詳しく記していきたい。

### 一、校歌を収集するに至った経緯

平成二十六（二〇一四）年に、武蔵野文学館の新たな研究題材を決定する話し合いが行われた際、翌年が土岐の生誕一三〇年にあたることから、それに合わせて「土岐善麿」について研究をし公開するのはどうだろうかという提案があった。先に述べた通り第一回展示にも土岐はとりあげたが、今度は土岐を単独でとりあげることである。では土岐の何を研究するのか。短歌、ローマ字、新作能、漢詩など多くの選択肢があったが、武蔵野文学館としては、土岐の業績としてあまり知られていないであろう「作詞」について、特に、教育者でもあった土岐が手がけた「校歌」についてを研究し、公開するのが良いのではないかという結論に達したわけである。

ただし、残念なことに「生誕一三〇年」を記念しての催しは行うことができなかった。悔いるべきことである。

## 二、校歌収集の方法

校歌を研究するには、何よりも土岐が作詞した校歌をすべて収集することが重要である。よって、収集の活動が始まった。

校歌の収集にはインターネットの情報を活用することにした。それは、学校が公式にウェブサイトを運営していることが現在ほぼ一般的であり、そこに校歌の歌詞や、作詞者、作曲者が載せられている場合が多いからである。

しかし、全国の学校のウェブサイトを闇雲に一つ一つ確認して回るのは非効率的であり手間と時間がかかる。そこで参考にしたのが、『周辺』（第一巻第十号、一九七二年十一月）に収載された冷水茂太氏による「土岐善磨作詞校歌一覧表」であった。この表は、土岐が校歌の作詞をした学校を「小学校」「中学校」「高校その他」の三つに区分し、それぞれの校名・作曲者・作年月を列記したものである。冷水氏によれば二百六十三校が記されている。この表は、調査をする学校にあたりをつけるとい

う意味で助けとなった。ただし注意しなければならないのは、これは冷水氏が調べた時点での情報だ、ということである。つまり、校名が改称されたり、統合されたり、廃校になってしまったりと、学校の状況がこの表が作成されたときと変わっている可能性があるのである。

だからと言ってそのような学校は調査せずともよいということにはならない。校名が変わっても土岐作詞の校歌を歌い継ぐ学校は実際にあり、また廃校になって今ももう歌われなくなってしまうとしても、それは確かに土岐関わった作品として存在していたものだからである。

さて、冷水氏による一覧表を手掛かりとして収集を開始したわけだが、程なく三つの問題が出てきた。

一つ目は、学校公式ウェブサイトには、歌詞以外にも校歌の研究を行う上で重要となる情報が掲載されており、これらも同時に記録していく必要性が出てきたことである。重要となる情報とは、作曲者、校歌の制定年月日、制定当時の校長名、校歌を作ることになったいきさつに加え、学校の所在地などの基本的な情報、沿革など

もこれにあたる。

二つ目は、公式ウェブサイトに校歌の情報が見当たらないが、他のウェブサイトに有益な情報を見つけられる場合も多かったことである。他のウェブサイトとは、主に学校の同窓会、学校を設置している法人などが運営しているものことである。

三つ目は、ウェブサイト以外に、冊子媒体のもので有用な情報が記載されている資料を見つけ、これも記録が必要になったことである。

収集を始めた段階ではこれらを予想できておらず、何をどのように記録するかも定まっていなかったため、作業者ごとに記録の仕方も記録の内容も一致していなかった。そこで、「何を記録するべきか」を話し合い定めた上で、記録方法を統一するために「土岐善麿作詞校歌

webサイト・冊子調査票」(以下、調査票)をMicrosoft Excelで、記入の仕方を記した手引きをMicrosoft Wordで作成した。ウェブサイトと冊子を分けなかったのは、研究に有用な情報はひとところに蓄積しておいた方が利便性がよいと判断したからである。

では、この調査票について詳しく説明する。

調査票は八つのシートからなる。うち六つが情報を記入するためのもの、二つが作業者の操作を簡便化するために挿入したドロップダウンリスト用のデータである。

六つの記入用のシートとして、「記入シート確認表」「学校情報」「学校公式webサイト調査票」「公式以外のwebサイト調査票」「冊子調査票」「全体的な補足」を作成した。なお、決まりとして、ウェブサイト上や冊子中の記載をそのまま記入することを厳守とした。明らかに誤りであってもとりあえずはそのまま記入し、誤っている点を各記入欄の備考に記すことになっている。これは、収集の作業に集中するためと、実は誤りではないのに訂正してしまったことで後々研究の妨げになる、という事態を起こさないためである。

記録用のシートの内容は次の通り。

#### 一 シート目…記入シート確認表

情報を記入したシートはどれなのかを記録するもの。情報を記入したシートの欄に「○」をつけておくこと

で、作業者がどのシートに記入をしたかが一目で把握できる。

## 二シート目…学校情報

学校の基本的な情報を記録するもの。

情報源としたウェブサイトのURL、情報を確認した年月日、学校名、所在地、電話番号、FAX番号、メールアドレス、備考と、主な沿革を記入できる。校名、所在地、沿革は校歌に深く関わっているため、記載があれば確実に記入する。電話番号などの連絡先は、学校に問い合わせをするときのために記入することにした。

## 三シート目…学校公式ウェブサイト調査票

学校が公式に運営しているウェブサイトが存在し、そこに校歌情報が記載されていたときに、それを記入するもの。

公式ウェブサイトはあるものそこに校歌情報がない場合は、必ず「ウェブサイト中に校歌情報なし」のチェックボックスにチェックを入れる。シートに記入がない理

由が、調査したが情報が無かったからなのか、未調査だからなのかを区別するためである。

調査票はA4サイズ四ページで構成している。

一ページ目には、まずウェブサイトの確認日と校歌情報が記載されているページのURLを記入し、次に六つの調査項目にそって情報を記入していく。①作詞・作曲者、②歌詞に含まれる語、③校歌制定年月日、④校歌制定時の校長名・校名、⑤作詞の経緯、⑥校歌の視聴である。この六項目のうち、②④⑤⑥について要点を述べる。

②歌詞に含まれる語は、「地名等」「学校名」「武蔵野（武蔵野地域のみ）」という、校歌の歌詞中にこれらの注目すべき語が含まれていたかどうかを記入する。

④校歌制定時の校長名・校名について、校長を記入するのは、土岐に歌詞を依頼した人物が校長である場合が多いのではないかと考えられるからである。

⑤作詞の経緯は、ウェブサイト中の記載が長文であっても、作業者が要約することはせずに一言一句そのまま記入する。

⑥校歌の視聴は、動画または音声によって校歌が視聴

できる場合、視聴ページのURLと、そのファイル形式と、歌声が入っているのか伴奏のみなのかを記入する。

二ページ目には、校歌の歌詞を記録する。作業者がウェブサイトを見ながらキーボードで打っていくのではなく、ウェブサイト中の記載を「コピー」し「貼り付け」るのが望ましい。これは、打ち間違いや思い込みによる歌詞の誤記入を防ぐためである。また、校歌がJASRAC等の音楽著作権管理団体に管理委託されている、その団体による楽曲の管理番号（作品コード）が分かれば記入する。

三ページ・四ページ目には、これまでの情報について欄内に記入しきれなかったことや、補足したいことを、次の六つの種別に振り分けて記入する。

〈校歌〉…校歌情報全般。

〈経緯〉…作詞の経緯。

〈言葉〉…作業者が歌詞中で注目した語。

〈学校〉…学校情報全般。

〈一般〉…右記に振り分けられない情報で、記録しておきたいこと。

〈卒業生〉…この学校を卒業した著名人。

#### 四シート目…公式以外のwebサイト調査票

学校の公式ウェブサイトの他にも有用な情報が記載されているウェブサイトがある場合、そのウェブサイトの情報を記入するもの。

五ページからなり、二ページ目から五ページ目の形式は、「学校公式webサイト調査票」シートとほぼ同一である。

一ページ目に、ウェブサイト確認日、サイト名、URLと、記載があれば所在地、電話番号、FAX番号、メールアドレスを記録する。なぜ所在地や連絡先を記録するのかというと、前述したようにこの「公式以外のwebサイト」を運営しているのは、学校の同窓会や学校を設置している法人などが多く、これらが公開されていることがあるからである。

公式・同窓会・学校法人のウェブサイト中には校歌の情報が無いが、個人が運営しているサイト（学校の卒業生など）に参考となる情報があれば、それもここに記入

する。ただし、そのようなウェブサイトの情報には確かな典拠が無かったり、自身の記憶のみに頼って記載していることがあるなど信憑性が低いと言わざるをえないので、あくまで確実な情報にたどりつくための足がかりとして記入するのみとなる。

#### 五シート目…冊子調査票

冊子（インターネット上にPDFファイル等で公開されているものも含む）に記載された情報を記録する。学校の記念誌が特に有用と言えるだろう。

「公式以外のwebサイト調査票」と同形式だが、一ページ目は書名、著编者、出版社、発行年、冊子の媒体（紙媒体、PDFなどの電子媒体、その他）を記録する。

#### 六シート目…全体的な補足

「学校公式webサイト調査票」「公式以外のwebサイト調査票」「冊子調査票」に記入しきれなかったことや、これらの調査票には適さない情報を記入する。

以上が調査票の内容である。

なお、作業者は調査票に情報を記入しながら、次のようなデータも収集し保存する。

- ・ 校歌の情報、学校の沿革、その他有益な情報が記載されたページの画面キャプチャ。
- ・ 校歌の楽譜。
- ・ 校歌の音声ファイル。
- ・ 有益な画像（校歌碑等）。
- ・ 学校だより等のPDFファイル。

調査票とこれらのデータは一つのフォルダに収める。フォルダ名は学校名とするが、その先頭に学校が所在する都道府県を示す二桁の数字（都道府県区域コード）を入力しておく。こうすることによって、調査票等を収めた各学校の多くのフォルダを、所在地ごとに整列させることができ、見やすく、整理もしやすくなる。

いずれはこれらを紙に打ち出して綴じ合わせ、手に取

The image shows a survey form for school official websites. The title is '学校公式webサイト調査票'. It contains several sections with checkboxes and input fields, including '学校名称', '所在地', '設立年', '校長名', '校歌名', and '校歌の歌詞'. There are also sections for '校歌の発見者' and '校歌の収集者'.

学校公式 web サイト調査票  
(一ページ目)

The image shows a form for school information. The title is '学校情報'. It includes a section for '学校名' and a section for '基本情報' with fields for '所在地', '設立年', '校長名', '校歌名', and '校歌の歌詞'. There is also a section for '校歌の発見者' and '校歌の収集者'.

学校情報

り閲覧できるようにすることを考えている。

さて、このようにして主にインターネットを利用して校歌を収集してきたが、学校ごとにウェブサイトを運営方針や校歌への思い入れに差があるためだろう、校歌について様々な情報を載せている学校もあれば、校歌をまったく載せていない学校もあるなど、どうしても収集した情報にばらつきが出てしまっていた。特に楽譜の収集は困難であった。

しかし、昨年度、この懸念を拭い去る幸運に武蔵野文学館はめぐりあうことができた。それは、土岐善麿の令孫である土岐康二氏より多くの貴重な資料をご寄贈いただいたことである。資料の種類は多様であり、その内に校歌に関する資料もかなりの数が含まれていた。この資料によって、校歌の歌詞だけでなく楽譜までもを確認することができ、それまでに収集してきた情報の補完と新たな校歌の発見が叶ったのである。この校歌に関する寄贈資料については、武蔵野文学館スタッフの藤井真理子氏による一覧が本紀要に掲載されているのでご参照い

ただきたい。

更に、ご令孫からは資料をご寄贈いただいただけではなく、ご本人にお目にかかりお話を拝聴することもできました。ご令孫は土岐善磨の仕事や交友関係などに大変お詳しく、また「祖父」のことをとても愛しておられ、土岐善磨が逝去してから四十年近く経とうとする今でも様々なことを実に鮮明に覚えておいでであった。

ご令孫には、武蔵野文学館のために資料をご寄贈くださったことと、ご多忙の中わざわざ武蔵野大学まで足をお運びになりお話をしてくださったことに、心から感謝を申し上げます。

校歌の収集は現在も継続中であるが、寄贈資料の助けを得ながら、引き続き精力的に活動を行っていききたい。

### 三、収集の成果

これまでに収集した校歌の数は二百八十曲（小学校九十、中学校八十九、旧制中学校二、高校・高等専門学校八十五、大学・その他十四曲）になる。これらの学校の

全国分布を見ると、宮城県・滋賀県・和歌山県・岡山県・広島県・高知県・長崎県・佐賀県・大分県・熊本県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県を除く三十四都道府県の学校が、土岐作詞の校歌を歌っていることがわかった。土岐はこれらの校歌の歌詞を作るとき、心がけていたことがある。「校歌」〔弁論〕、第四十二号、一九五二年一月）に、次のように書かれている。

遠隔の地でも、曾遊を回顧して、その地勢など、すぐ思い浮かべられるところもあり、行つたことのない地方については、資料や附近の見取図などを送つてもらい、その環境などを想定しながら、まとめることもある。近県ならば、ひまをこしらえていちおう学校の参観を試みる。

（読みやすさを考慮し旧字体は新字体に改めた。）

訪れたことのある土地なら記憶から地勢を思い浮かべ、行つたことのない土地なら学校の資料や付近の見取り図を送ってもらい、近県ならば足を運んで実際に見て

みる、というように、その学校の特徴や雰囲気や掴むように努めていた。また、学校に参観した際には生徒の前で講話をして、その生徒たちの態度や表情から歌詞のモチーフを得ることもあった(同上書)。

それでは、武蔵野文学館が校歌を収集した成果として、由利本荘市立本荘北中学校の校歌をここにとりあげ解説したい。

### 由利本荘市立本荘北中学校

由利本荘市立本荘北中学校(以下、本荘北中学校)は、秋田県南西部の海寄りに位置する公立中学校で、一九四七(昭和二十二)年五月二日に本荘町立本荘中学校(以下、町立本荘中学校)として開校した。校歌が制定されたのは、その町立本荘中学校の開校から一年十ヶ月ほどの、一九四九(昭和二十四)年三月七日のことであった。

土岐は戦後に多くの学校から作詞を依頼されるが、その中でも早い時期のものがこの「町立本荘中学校」の校歌である。町立本荘中学校が土岐に作詞を依頼すること

にした経緯は詳らかではないが、戦争が終結してまだ数年も経たない中で開校したこの中学校にとつて、学校の象徴ともなる校歌の作詞を任せることができる人物がまさしく土岐だったのであろう。

作詞を依頼するにあたり、秋田に訪れたことがない土岐のために、当時の教諭が土地の風景画を描いて東京の土岐に送った(「歌い継ぐ校歌42 自由と平和高らかに」『秋田さきがけ』二〇一五年十月六日付)。また、併せて学校に関する資料も届けたようだ。土岐は、これらの資料をもとに、遠く秋田の地で懸命に勉学に励む子供たちの姿を想像しながら作詞に勤しんだはずだ。こうして生み出された歌詞が以下である。

一、春は桜に照るや鳥海

秋は子吉の平野のみのり

ああ親し郷土の空よ風よ

強く明るく豊かに学ぶ

本荘ここに我等あり

二、松の緑に映ゆる鶴舞

雲は世紀の光に流る

ああ消えぬ歴史の跡よ城よ

永久に岸打つ浪音高く

本荘ここに我等あり

三、ペンに輝く自主の星影

常に自由と平和を守れ

ああたのし校舎の窓よ庭よ

絶えずたゆまずこぞりて励む

本荘ここに我等あり

一番は学校を取り巻く風景を描く。「鳥海」は鳥海山のこと、「子吉の平野」は本荘平野のことである。本荘北中学校は、子吉川の北側の新山の麓にあり（由利本荘市石脇字山ノ神11―304）本荘平野からは少し外れているが、開校当時の町立本荘中学校は現在の鶴舞会館（由利本荘市瓦谷地1）付近にあったというから（5月2日開校記念日特集 本荘北中学校の歩み）『新壘』平成二

十五年度第六号）、本荘平野の中に位置していたことになる。

二番は土地の歴史を記す。「松の緑に映ゆる鶴舞」「永久に岸打つ浪音高く」は、学校から日本海が近いことと、江戸時代にその日本海沿岸から吹き付ける風に巻き上げられた砂の被害をなくすために、松を植樹してつくられた防砂林をいつている。「ああ消えぬ歴史の跡よ城よ」は本荘城跡地のことだ。本荘城は、別に尾崎城または鶴舞城と称し、慶長十九（一六一四）年頃に築城された。戊辰戦争の際に焼失してしまったが、跡地は大正時代に史跡公園として整備されている。この城跡地は町立本荘中学校から二百メートルほどのところにあつたため、学校にとっては身近な場所だったのであろう。なお、本荘北中学校からはこの城跡地まで二キロメートルほどの距離がある。

三番は学校の校章と精神を示す。校章は開校の約二ヶ月後の昭和二十二年七月十五日に制定された。「校章の「ペン」は「文化」「学問」を象徴し、「三つの星」は日本国憲法の精神である「民主・自由・平和」の精神を校

是とする、文化の殿堂本荘中学校（本荘北中）を表している。」（『新壘』同上）という。ここから「ペンに輝く自主の星影」「常に自由と平和を守れ」という歌詞が生まれたのだろう。また、これは、土岐が学校の資料として風景画だけでなく校章についても受け取っていた証明にもなるう。

この校歌の曲は作曲家の信時潔が担当しており、本荘北中学校の校長室にはこの信時による校歌の楽譜の原譜が額に入れられ飾られている（『新壘』同上）。

信時は「海道東征」「海ゆかば」「沙羅」などを作曲した人物だが、土岐と親交が深く、二人が組んで作詞・作曲を行った校歌も多い。現在の東京都国分寺市では信時がその地に住んでいた縁から第一・第二・第三・第四小学校と第一・第二中学校の作曲を依頼し、信時の紹介により土岐が作詞を担当したという話がある（『信時潔 生誕120周年記念行事に取り組んで』国分寺市立公民館、二〇〇七年）。

土岐が作詞した二百八十曲のうち、三分の一ほどが信時の作曲である。今後は歌詞だけでなく、信時のように

作曲家と土岐との関係も重視して研究していく必要があるだろう。

#### 四、成果の公開

武蔵野文学館では、校歌の収集の成果を、土岐善磨記念公開講座特別公演において二回公開している。一回目は平成二十八（二〇一六）年二月十二日開催「能と土岐善磨 「実朝」を観る」での展示「土岐善磨と校歌」、二回目は平成二十九（二〇一七）年二月十二日開催「能と土岐善磨 「鶴」を観る」での講演と展示「文学に遊ぶ」である。なお、展示では校歌だけでなく、土岐の新作能の解説や土岐が能を舞う姿などの写真のパネルも作成した。

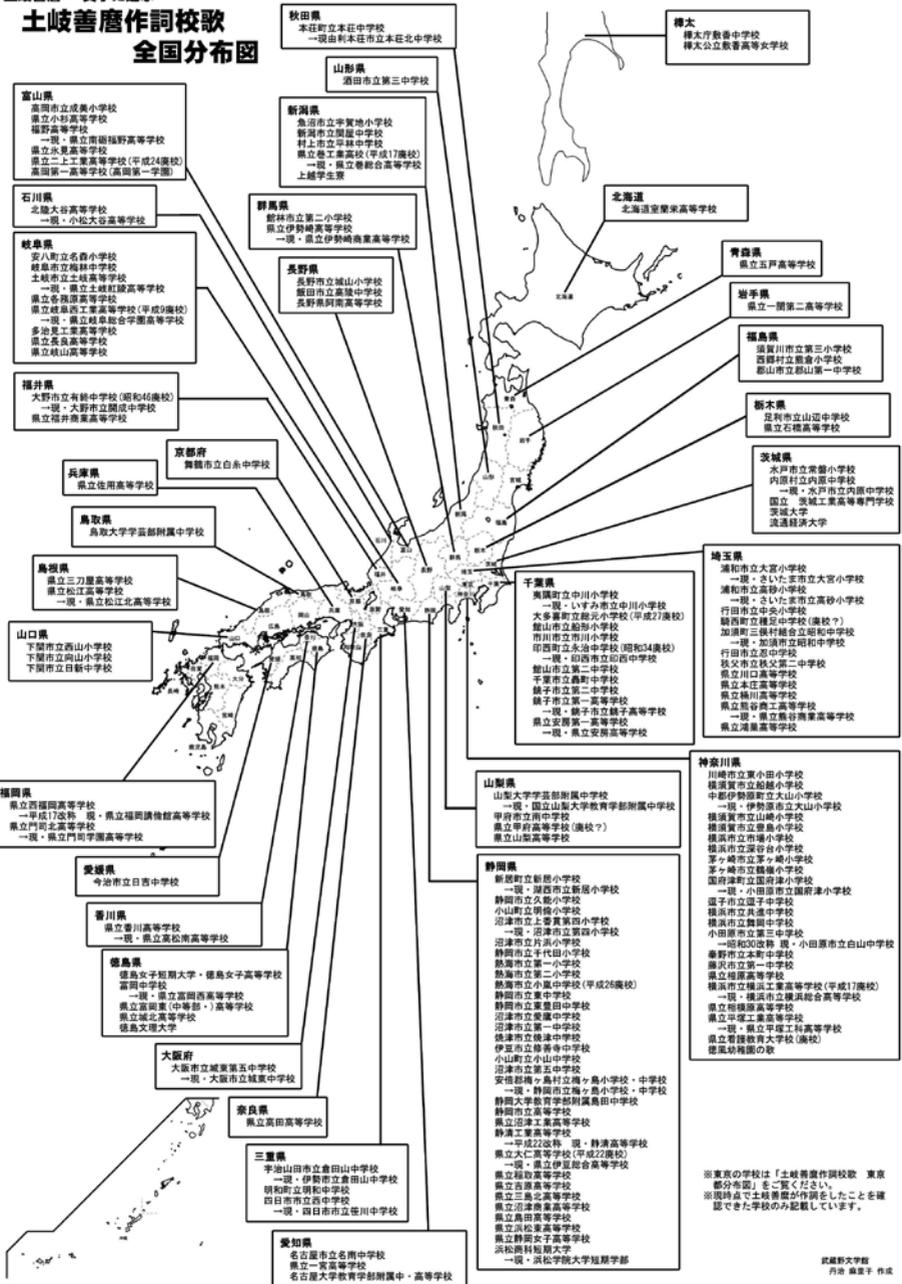
校歌についての展示の内容は次の通り（二回ともほぼ同一内容）。

・解説パネル（概要説明、敷香高等女学校・由利本荘市立本荘北中学校・市川市立市川小学校・東京都立日比谷高等学校の校歌について）。

土岐善磨 一文学に遊ぶ一

# 土岐善磨作詞校歌

## 全国分布図



※東京の学校は「土岐善磨作詞校歌 東京部分分布図」をご覧ください。  
※現時点で土岐善磨が作詞をしたことを確認できた学校の小記載をしています。

武蔵野文藝  
内海 倫子 作成



- ・解説パネルの四校の歌詞と楽譜。
- ・校歌視聴のためのPCと、視聴できる校歌の一覧・歌詞。

・土岐が校歌について執筆した論文。

・土岐善麿作詞校歌の全国分布図（全国版・東京都版／B0判）。

この他に、資料として土岐善麿の年譜（A5判）を来場者に配布した。

筆者も展示会場に立ち、来場者と話をしたが、土岐が校歌の作詞をしていたことをこの場で初めて知った人が多かった。分布図を見たある男性は、「自分の出身校がここに載っていて驚いた。自分の子どももこの学校を卒業したし、孫はまさに在学中だ。自分と子どもと孫の三代で土岐作詞の校歌を歌っていたとは。」と話してくれた。

講演では筆者が機会を与えていただき、拙いながら土岐のこと、土岐の作詞した校歌のこと、武蔵野文学館のことをお話しした。土岐に興味を持つ来場者は、配布された年譜を見ながら、時に頷きながら耳を傾けてくれた。

今後ともこのようにして土岐が校歌の作詞を行っていたことを示し、さらには校歌以外にも作詞をしていたことを広く周知していきたい。

## 五、おわりに

土岐は三百近い校歌の歌詞を作詞してきたが、そのことについて次のように考えていた。

校歌というものは、しかし、特定のものが作つたものにならないほうがいいのではあるまいか。即ち、その歌詞は、その学校の生徒ないし児童、または学生たちが、めいめい自分で作つたそのような気のことを表現条件の一つとすべきであろう。ただ、めいめいがかつてに作つたものに節をつけてうたつていたのでは、バラバラで、制定された校歌とはならないから、たとえばぼくが依頼されたとすれば、ぼくが皆に代つて、皆のうちに持つている発想の欲求にできるだけけそうようなものとするに過ぎない。このことは、作る前に学校を参観する

とき、あるいは、できたあとの発表会のときなど、あいさつの機会を得て、かならずしくは語っておくことにしている。

『教育音楽』第十巻八号、一九五五年

このように土岐は、校歌はその学校に通う子どもたちのものである、という意識のもと作詞を行ってきたのである。

さらに土岐は、表現だけでなく表記にも気を付けていた。そのことをうかがわせる話が『短歌シリーズ 人と作品11 土岐善麿』（武川忠一、桜楓社、一九八〇年）附録の月報「短歌研究7」中の、作曲家渡辺浦人による「土岐善麿先生と私」に見える。

土岐先生の作詩で、「上越学生寮の歌」を作曲し、その楽譜が印刷されて私たちに届けられた時のことです。いつもおだやかな先生が、その時は大変怒りました。私の音楽に対してではありません。音楽とは別に先生の作詩がたて書きで印刷されていて、先

生がわざわざひらがなで書かれている部分を全部漢字に直してあったからです。「僕は漢字を知らないでひらがなを書いたのではない。よく考えてここはひらがながよいと思うところをわざ／＼ひらがなにしているのです。全部僕が書いたとおり直して印刷して下さい。」千部印刷したものを全部新しく刷り直させました。漢字をたくさん使うほど教養があるように考えられがちですが、一般にこのような考えをもつ人が多いのは、やはり学校教育の誤りでしょうか。

上越学生寮とは、「上越地方出身者で東京在住の民間有志が中心となり、明治38年に創立された完全自治の男子学生寮」(<http://www.city.joetsu.nigata.jp/soshiki/kyouikusoumu/kenshin-academy.html>) 二〇一八年一月十四日確認)である。現在は解体され、上越学生寮奨学基金が設置されている。

土岐が怒ったのは、渡辺が言うようなこともあるかもしれないが、上越市から東京都に出てきて勉学に励む学

生を思いながら彼らの代わりとなって作詞をしたその歌詞、つまり彼らの作品とも言える歌詞のその表記を、軽視してほしくなかったからだとも考えられないだろうか。

土岐は校歌を「特定のものが作つたもののようにならないほうがいいのではあるまいか」と言う。武蔵野文学館が「土岐の作品」として校歌を収集し公開していくことはこの言葉に反するかもしれない。しかし、一つ一つに巧みな表現が見られること、表記にもこだわり抜いていることから、校歌は土岐の「ことば」を研究する資料として注目すべきものである。よって、武蔵野文学館では今後も校歌を収集し研究していくことを、土岐善磨先生にはどうかお許しいただきたい。

### 補足…冷水茂太による「土岐善磨作詞校歌一覽表」について

土岐が作詞した校歌の調査としては、冷水茂太氏による「君らの声―善磨作詞校歌の調査―」（『周辺』、第一巻第十号、一九七二年十一月）があり、ここには冷水氏が校歌を調査することになったいきさつとその報告が記

されている。また、「土岐善磨作詞校歌一覽表」（以下、「一覽表」）もこの稿に確認できる。しかし、これを先行研究と見なすには厳しいものがあり、武蔵野文学館で校歌を収集するにあたりこの一覽表を参照はしたが、資するところが大きかったとはどうしても言い難い。このことについて述べていきたい。

この「君らの声」を先行研究と見なせないのは、まず何より冷水氏自身が「本稿は未<sup>○</sup>完<sup>○</sup>ではあるが、その調査の報告である。」（「一覽表の」作曲者名、制作年次がブランクのところは、作者の原稿控によつたもので、未<sup>○</sup>調<sup>○</sup>査である。今後、個々に調査を進めてゆきたい。」（傍点<sup>○</sup>は筆者による）と言っているためである。このことから、冷水氏が校歌についてまだ十分に調査をできていなかったこと、手元の資料からひとまずこの稿をまとめたと思われること、一覽表が未完成のものであることがわかるだろう。

また、一覽表については、作成に労力を要したであろうことは理解した上で次のような問題点を指摘しなければならぬ。

## ①校名の表記が正式なものではない、且つ不統一

限られた高さの枠の中で校名を一行で記すためにはやむを得ないことだが、校名のみを表記のため、どこに所在する学校なのか、公立なのか私立なのか不明である。例えば、小学校欄に「大宮」とあるが、大宮小学校はいま、さいたま市・千葉市・東京都杉並区・富士宮市・京都市・大阪市・奈良市など全国に存在している。そのため、このように「大宮」だけではどの大宮小学校なのか特定できない。武蔵野文学館で調査したところ、「さいたま市立大宮小学校」（校歌制定時は大宮市立大宮小学校）であることがほぼ確定している。

しかし逆に、中学校欄に「秋田本庄」とあるように、所在地が付されている学校もある。なお、この「秋田本庄」は「本荘町立本庄中学校」（現・由利本荘市立本庄北中学校）のことと考えられる。

つまり、校名の表記が正式ではなく（「〓市立」〓県立」等が付されていない）、不統一のため、どの学校なのか曖昧になり、表記にもまとまりがないのである。

## ②一覧表の完成から時が経っている

一覧表は少なくとも昭和四十七（一九七二）年以前に作成されたものであるから、完成から現在までに四十年ほどの時が経っている。この間に校名の改称や統廃合などが行われている学校も大変多い。そのような学校は一覧表と現状とが一致しなくなっている。

## ③戦後に作詞した学校のみ記載

冷水氏は「君らの声」の中で、土岐が戦前に校歌を作詞した学校として「敷香高等女学校」を挙げている。ところが、一覧表は戦後に作詞した学校のみ記載されているため、この「敷香高等女学校」の名は見えない。

同稿において「戦前の作詞資料はあまり残っていない」「作詞依頼のピークは昭和二十五年から約十年間であった」とあるので、冷水氏としてはより戦後の校歌に注目したのだろうと推察できるが、土岐作詞の校歌の一覧表であるならば、判明している数が少なかったとしても戦前に作詞した校歌も記載して然るべきだろう。

武蔵野文学館では校歌の収集において、冷水氏の一覧表を参照はしたが、校歌の研究に必要な項目を独自に定めて独自の方法で、正確を期して作業を行ってきた。これにより、正式な校名、所在地、制定年月日、歌詞等の校歌の基本的な情報は元より、楽譜や校歌依頼の経緯も収集することができた。

さらに、学校の沿革と現状を把握することによって、本文「三、収集の成果」で記した由利本莊市立本莊北中学校のように、校歌制定時の校名は「本莊町立本莊中学校」であったこと、校舎は本莊北中学校より子吉川を挟んで南側に位置していたこと、それ故にこのような歌詞が生み出されたことなどが考察できたわけである。

冷水氏の調査について、特に一覧表のことを批判的に述べたが、冷水氏の成果を否定しているわけではない。武蔵野文学館は今後も冷水氏が調査を行ったことに敬意を払いつつ、校歌の収集と研究を進めていく所存である。

(たんじ まりこ 武蔵野文学館研究員)